

2024年度 こどもの木かけ・野のはな空のとり保育園 自己評価

保育所における自己評価ガイドラインより：「保育所が、保育士等の自己評価を踏まえ、全職員の共通理解のもと、組織としてより良い保育に向けた改善や充実に取り組むために行なう」

1. 基本理念・保育方針

■こどもの木かけ 2002 基本理念

『汝らは、地の塩、世の光である』
(マタイによる福音書5章第13節—14節)

キリスト教の愛の精神を基とし、幼な子が、自ら生きる力を高め、豊かな個性を育むことをめざしています。こどもの木かけ（玉成幼稚園・野のはな空のとり保育園）では、0歳から就学まで一貫した保育方針にもとづき子どもの育ちに取り組んでいます。

■野のはな空のとり保育園 保育方針・保育目標

『子どもが現在を最も良く生き、のぞましい未来をつくり出す力の基礎を培う』

子どものありのままの姿を受け入れ、健全な心身の発達をめざして、1人ひとりに丁寧に向き合っ保育を行ないます。そうして子どもの最善の利益を尊重し、福祉を増進するにふさわしい生活の場をつくり出す。

- ・子どもたちがのびのびと自分を表現できる生活を大切にします
- ・具体的な経験を通して感性を育て、達成感を味わえる働きかけをします
- ・子どもの気持ちを受けとめ、基本的な生活習慣や人への信頼関係を育てます
- ・おとなとの愛着関係を育み、豊かな生活世界を拓げます

こんな子どもに育ってほしい…アルウィン学園のめざす子ども像

- ①生きる力の礎である「自らの力で探求し判断しながら人とのかかわりをおとした生きる喜びや自己表現が達成」できるように
- ②「ひとりひとりが違ってよい」興味や得意なことを伸ばし個性豊かになれるように
- ③あそびをとおして感性や知的能力・創造性・社会性を体得できるように

すべては環境から

安心して生活し、あそび「空間」環境と、優れた遊具や本物・良質な家具や調度品といった「物的」環境、子どもを愛し慈しむ心と自己研鑽を怠らない保育者という「人的」環境、これらが相まって子どもが主体的に学びの物語を紡ぐ、充実した「時間」の環境がつけられていきます

2. 活動状況と自己評価

【基本的事項】（こどもの木かけ共通）

◆こどもが、自らの力で取り組む姿勢が育ち、周囲とのかかわりを高め、育ちあえているか

おとなとの愛着関係や信頼関係が土台となって、安心して興味関心を持ったあそびにとりくむ姿は、どのクラスも着実に育っている。今年度も中途退園・入園の多い年だったが、在園児が自然に新しいお友だちを受け入れ、仲間になっていく。新入園児保護者が、入園後にわが子が「覚醒」した、と驚くほどだった。自分の思いを人に伝え、人とのかかわりを求め、育っていくことの喜びを子ども自身は強く感じている。保育者も当然そのことにやりがいを感じると同時に、保護者にも、おとなの言うことを聞くだけの良い子の姿だけでなく、自分の思いを出せることを、成長の喜びとして受け入れられるように伝える努力を続けてきた。

◆子どもたちに豊かな感性が育つようとりくみや自発的なあそびをとりくめるように保育をおこなってきたか

今年度は「とうきょうすくわくプログラム」に参画した。このプログラムのコンセプトはそのままこの枠のテーマと重なるため、主体的な探究活動と豊かな心の育ちを重視した活動を展開した1年だった。「運動あそび」「わらべうた」「食育」「環境」の各プロジェクトの活動がリンクするようなテーマを設定した。野菜の栽培や、体を動かすあそび、食育活動とおして、子どもたち自身が自分の成長に気づく瞬間のことはなどを拾い上げ、その気づきを更に上げられるような活動を意識してきた。

【重点的にとりくむ課題（今年度の事業計画から）】

こどもの木かけの基本理念を踏まえた質の高い保育を実践するための、全職員の更なる資質向上と専門性の向上にとりくむ

今年度から処遇改善加算Ⅱを導入し、3つの若手リーダーという職位を創設した。3つのあそびに関し熟意をもって学び、知識を同僚たちと共有し、そのあそびをリードして子どもと一緒に楽しむことが出来る力を持つ。一例として「絵本リーダー」は各クラスにその時期にあった絵本を提案し、クラスに置く絵本をより充実させた。これにより子どもたちは今まで以上に絵本に親しみ、絵本をおしてお友だちとのかかわりが広がり、言葉との豊かな出会いによって、気持ちも成長している。他の職員も若手リーダーたちに触発され、あそびの引き出しを広げてきた。

保育実践の記述の学びを継続し、質の高い保育を可視化するとりくみを続ける

今年度から、連絡帳や日誌、指導計画などの手書きをやめ、ルクミーによる帳票管理のICT化を前進させた。職員各自がパソコンやレンタルの携帯電話アプリから入力する方式となり、同じような内容を連絡帳と日誌両方に書かなくても連動するため、省力化にはなっている。その反面、書いた内容の確認が、保護者に配信された後になることもあり、チェック機能を強化する必要がある。また、表現力や語彙力、ネガティブワードの使用など、まだまだ個人差が大きいことを感じた。全体会議で学ぶ機会を持ってきたが、子どもの姿を「観る」力と、それを「記録する」力の維持向上は、ICT化の導入に追いつく大きな課題である。

地域の子育て家庭と、園の保護者に向けた子育て支援にとりくむ

処遇改善加算Ⅱ導入によって創設した5つの職務分野別リーダーも、力を発揮している、中でも「子育て支援リーダー」が中心となり、乳児の食事作りに悩む保護者のために在園児の保護者からアンケートを取り、様々な声を拾い上げて、参考にいただいた。他にも第二子が生まれた家庭の悩みや、様々な子育て支援に尽力している。地域の子育て支援では、親子ひろばに保育園の主任・副主任が参加するようになり、あそびのバリエーションを広げると同時に、子育てのアドバイスも積極的に行った。ひろば利用をきっかけに保育園入園やふたつの芽、満3歳クラスに入った方が大変多く、木かけの評価向上に繋がったと思う。

3. 今後の課題・取り組んでいきたいこと（中長期的視野に立って）

今年度の事業計画のキーワードは、「専門職としてのあそびの引き出しを増やす」であった。あそびの引き出しは、単にあそびの種類や量のバリエーションをたくさん持っている、ということだけではなく、子どもの特性や姿を見極め、どんなタイミングで提供するか、も大切な力量である。1年間で全て身につけるのは難しいが、今後も若手リーダーが中心となって、各自が熱意をもって取り組んでいきたい。

来年度は0歳児クラスが定員の約半数程度でのスタートとなる。育児休暇制度の充実と少子化の影響で、どの園も同様の状況である中、空きを活用して、2025年度から制度化される「こども誰でも通園制度」を実施する保育園が増えていくことが予想される。当園としては実施可能であるのかどうか、制度をよく吟味して長期的な視野で検討していく必要がある。

同時に、杉並区が「弾力化」を順次廃止していく方針であり、これにより当園も受け入れ園児数が減少するが、子ども一人ひとりの豊かな育ちを保障するために、保育士の確保と質の向上が重要課題であることには変わらない。年度の途中で入園し、徐々に定員を満たしていくため、受け入れ態勢はしっかりと整えておきたい。

こどもの木かけの理念を実現していくことや、子どもの育ちは0歳から6歳までひとつながりのものであり、それを幼保の木かけ全職員が協働して支えていくのだという意識を保ち続けていけるように、木かけの総力をあげて取り組んでいかなければならない。

◀ こどもの木かけ運営委員会による評価 ▶

1 評価項目の達成及びとりくみ状況について

保育者が子ども一人ひとりと丁寧に愛着関係や信頼関係を結ぶことを大切に日々の保育を行っていることが再確認された。今年度は3つの若手リーダー職位「運動リーダー」「わらべうたリーダー」「絵本リーダー」を創設し、あそびの引き出しを増やすことに取り組んでいる。また今年度特筆すべきは「とうきょうすくわくプログラム」へ参画、テーマを設定し取り組み、今年度の保育の広がりや深まりに活用できたことは有意義であった。

2 今後とりくむ課題

今後子どもを取り巻く状況においては、ますます少子化が進むことによる園児減少は避けられず、次年度においても0歳児クラスが定員に満たないスタートとなる中、変わらず「丁寧な保育」を続けていきつつ、さらなる保育の質の向上を目指すことが肝要であろう。また、幼稚園との連携を深めることで木かけ全体の価値を高めていくことが望まれる。

3 総合所見

「とうきょうすくわくプログラム」活動の一環で給食室の扉をガラス張りに替えたことで、子どもたちが調理を身近に感じることで、食への新たな興味を引き出すことに繋がったことや、ルクミーによるさらなるICT化推進など、積極的に前向きな取り組みも見られることは高く評価できる。今後も日々の保育の中での問題意識や諸々の制度の利用などを模索し、より良い姿の追及を願う。